

# くらしナビ

—ライフスタイル—



映画「友達やめた。」のワンシーン。まあちゃん(左)と話す  
今村彩子監督

©2020 Studio AYA

# 「友達やめた。」その先に

## アスペルガーとろう 葛藤を映画に

アスペルガー症候群とは、発達障害の「自閉スペクトラム症（ASD）」の一つ。知的な遅れはないため気づかれにくいたが、他人の意図や感情を言外から読み取る、いわゆる「空氣を読む」ことが苦手で、対人関係に問題を抱えることが多いとされる。例えばまあちゃんの場合、今村さん宅で今村さんの祖母が作ってくれたご飯を食べる時に「いただきます」を言わない。レストランでは、今村さんが頼んだ飲み物を勝手に飲んでしまう」といった具合だ。

今村さんとまあちゃんは、「話すより冷静に素直な気持ちが書ける」と交換日記でお

こからがアスペルガーで、どこからがまあちゃんの性格なのか」と悩みを打ち明ける今村さんに対し、まあちゃんもまた「ことばが攻撃的。何か言えば（自分を）正当化」と不満を書いている。

### ●頼られ対等な関係

「アスペルガーだから仕方ない、私が我慢すればいいと思つていました。アスペルガーノの人には『気持ちを分かって』と言うことは、私に『聞こえるようになれ』と言うのと同じだと」。今村さんは当初の思いをそう振り返る。一方、マイノリティーであるはずの自分が、まあちゃんから見たう「一般的な脳みその持ち主」という点で、マジョリティーの立場にいることにも気づいたという。

人と接するのが苦手なまあちゃんは、飲食店で注文しようと店員に声をかける今村さんを「すごい」とほめる。「耳が聞こえる家族や友人は、私が何かしようとするとき回りして助けてくれる。ありがたい半面『私にだってできる』と反発を覚えることもあります。でもまあちゃんどいる時は、チケットの手配や宿泊施設の予約などは私の担当。頼りにされ、対等な関係でいらっしゃることがうれしいんです」

生まれつき耳の聞こえない「あやちゃん」と、アスペルガー症候群の友人「まあちゃん」との「ミニミニケーション」の葛藤を描いたドキュメンタリー映画「友達やめた。」が東京・新宿の「K's cinema」などで上映中だ。マイノリティー同士だからこそ分かり合えるはず——。そんな期待が砕かれ、それぞれの生きづらさと「常識」の違いに戸惑うさまを、約1年半にわたって記録したものだ。製作した「あやちゃん」こと今村彩子監督(41)に、その思いを聞いた。

### ●「いい人ぶらない」

だが一緒に過ごす時間が増えるにつれ、我慢は限界に達する。今村さんは映画のDVD制作に忙しくなり、家族の病気が発覚して精神的に不安定になったまあちゃんを受け止めきれなくなった。「アスペルガーだから仕方ない」というのは、逆に失礼。私も聞こえないから仕方ないと思われたくない。いい人ぶって負の感情をため込むのをやめることにしました」。日記に「友達やめた」と書き込むと、気が楽になった。そして「まあちゃんと私の新しい常識を考え始めよう」と提案する。衝突を繰り返しながらも、関係を続けるのはなぜか。「まあちゃんと出会って、誰かの常識は誰かの非常識もあると気づきました。嫌な気持ちになり、疲れることがあるけど根本的に好きなんです」。今村さんはそう説明する。

### ●多様な価値観こそ

近ごろは、SNS上の誹謗中傷も問題となっている。そうした現状について、今村さんは「自分と違う価値観の人には『自分と違う価値観の人』がいたらぶつかるし、傷つくけど、だからこそ面白いんだと思う。自分のモノサシを固定してしまうから、それにはまらない人を排除してしまうのではないかでしょうか。同じ価値観の人に囲まれているのではなくて、それは世界は広がらない。裸の王様みたいで怖いと思うんです」。

映画「友達やめた。」は全国で順次公開予定。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、上映日まで配信している。大人1800円、ペア割3400円など。

【野村房代】